北の中世・発掘最前線

勝山館跡

（国指定史跡 上之国館跡）

柵、空堀で囲まれた城塞都市
921点の出土遺物が
国の重要文化財に指定

北海道南部から東北北部には「館（たて）」と呼ばれる遺跡が数多く存在する。海や河川沼沢に面した丘陵地に立地する中世の館跡から、さまざまな遺構やおびただしい遺物が掘り出されている。

地下に埋もれていたモノたちが、この北辺の地に「豊かな北の中世」が営まれていたことを雄弁に語り始めている。

中世の上ノ国は、箱館、松前と並ぶ代表的な港で、日本海北方交易の枢要な拠点であった。

勝山館は、夷王山を背に日本海に注ぐ天の川の河口や、天然の良港大澗湾を眼下に望む丘陵地に位置する中世の館である。内部には、中央平坦部に建物跡群が立ち並び、周縁部には櫓（やぐら）や門、柵列、空堀を有する防御機能を持った「城塞都市」の景観を持つ。後の松前氏の祖・武田信広が十五世紀末に築いたといわれている政治・軍事・交易の中心施設であった。

平成二年七月の上ノ国シンポジウムの報告集「海峡をつなぐ日本史」、勝山館跡発掘調査二十周年記念シンポジウムの報告集「北から見直す日本史」や中学・高校の日本史教科書をはじめ、数多くの歴史書で紹介されている。

昭和52年に国の史跡に指定されたのを契機に、昭和54年から現在まで史跡整備に伴う発掘調査が行なわれている。その結果、200棟程の大小の建物跡、井戸・空堀・柵列・橋・土塁・門跡・鍛冶遺構等の多数の遺構のほか、陶磁器、金属製品、木製品、土製品、石製品、骨角製品、ガラス製品など約7万点の遺物が発見されている。

このうち、主要な遺物921点が国の重要文化財に指定された。指定された遺物は、食膳・調理具、狩猟・漁労具、宗教・信仰具、文具、茶道具、遊興具、武器・武具、鍛冶関連具と多種類に渡っている。

分類すると以下のとおりとなる。

①ベトナム銭を含む銭貨、北方産のガラス玉や青磁、白磁、瀬戸・美濃、越前焼等の豊富な陶磁器等で示される当時の交易活動の実態を示す資料

②曲物・箸・折敷（おしき）・串・まな板・自在鉤・下駄・滑車枠や井戸水汲み用桶、木樋やその枕木材等の館の中での日常生活を示す資料や、人形（ひとがた）、経石（きょうせき）などの信仰用具。茶の湯や煙管（きせる）、碁石（ごいし）等の人々の嗜好を示す資料

③鏃、銛、矢の中柄等の骨角製品、シロシが刻まれた漆器などアイヌの人々が活動していた痕跡を示す資料

これらは、当時の北海道南西部における日本海沿岸各地との交易活動や、ここに居住した人々の生活・文化を復元する上で欠かせない資料であり、中世におけるアイヌの人々と和人との関係を考える上でも極めて貴重であり、その学術的価値は極めて高い。